

現代のことは

やまだ
山田 奨治



ふとした瞬間に、見慣れたはずのものが違ってみえたり、やたらと目立ったりすることがある。平成二十年はそんな「気付き」がいくつか記憶に残った。

たとえば、歌舞伎の南座・顔見世でみた「傾城反魂香」という芝居。大津絵で生計を立てる浮世又平が、師匠から画業の印可を許されるまでを、女房おとくとこの情愛をまじえて描いた物語だ。鶺鴒の又平、藤十郎のおとくの配役でみるのは、これで

三回目だった。

いままで又平の姿は、出世欲ばかりの俗物としか、わたしにはみえなかったのだが、今回は違った。又平が印可を許されて喜ぶさまが、正式採用された非正規雇用者の姿に重なり、彼のはしゃぎぶりに、はじめて共感することができた。おなじ配役なのにこころも感じ方が違うのは、役者の力量なのだろうか。

ものことの感じ方は、社会情勢だけでなく、体調にも左右さ

ふとした気付き

れることを知った。ちょうど秋口に健康を少し損ねていたころ、キンモクセイの香りが、いつもの年よりもずっと強く感じられた。ふだんは緑の葉っぱだけの木なので、何気なく見過ごしている。だがそのころは、ここにもいるのだよといわんばかりに、木々がいつせいに自己主張をしているように思えた。街中がこんなにもキンモクセイであふれていたことに、はじめて気が付いた。

いままで気が付かなかったといえは、ラ・フランスという西洋ナシ。どうも見た目が不格好で色合いもいまひとつ、しかもけっして安くはない果物だったので、わが家では買ったことがなかった。ところが、天候の加減なのだろうか、十月ころには

例年よりもずっと安い値段で、スーパーにたくさん積み上げられてあった。味わってみたら、品のある甘さが口いっぱいに広がり、すっかりとりこになってしまった。

消費者として物の値段は気になる。この一年のガソリン価格のように激しく上下すると、いやがおうにも気にかかる。道端のスタンドの料金表示に一喜一憂しながら、満タンにするタイミングをはかるのは、なかばギャンブルのような感覚すらあった。

ラ・フランスやガソリンのようなものにはむしろ例外で、物の値段は総じて上がった。原油が上がっているのだから、値上げも仕方ないかとあきらめもした。だが原油相場が下がっても、

定価はすぐには下がらないのは納得がいかない。

価格のように数字ではつきり表れる値上げだけではない、「見えない値上げ」もある。そのことに気が付かずにはいられない一年だった。ティッシュペーパーは一回り小さくなった。菓子類も小さく細くなったうえに、一袋に入っている個数が減った。ちくわもずいぶん短くなった。作る側は「新しい商品デザイン」のイメージを強調しているが、原材料費を抑えるための体のいい「見えない値上げ」ではないか。

新しい年には、美しいもの、すばらしいものに、もっともつと気付きたいものだ。

(国際日本文化研究センター准教授・情報学)